

ロングステイ研究 — フィリピン・アラバット島の シニアリゾートとしての可能性

今 防 人

英語コミュニケーション学科非常勤講師

一. はじめに

1. ロングステイの定義— ロングステイ財団によればロングステイとは「生活の主たる源泉を日本に置きながら海外の一箇所に比較的長く滞在し（2週間以上）、その国の文化や生活に触れ、現地社会での貢献を通じて国際親善に寄与する海外滞在型余暇」を総称したものとされている。¹ この言葉自体、ロングステイ財団によってつくられた造語である。

同財団は、ロングステイの特徴を次のように挙げている。²

1	比較的長期にわたる滞在である	「移住」「永住」ではなく日本への帰国を前提とする「海外滞在」で、比較的長期（2週間以上）にわたる滞在であること。
2	海外に「居住施設」を保有または賃借する	短期旅行者向けの宿泊施設ではなく、生活に必要な設備が整った、宿泊施設または適切な住まいを保有または賃借していること。
3	「余暇」を目的とする	海外でより豊かな時間を過ごし、現地の人々との交流などの余暇活動を行う事。（語学研修・各種文化活動への参加・ボランティア活動等）
4	「旅」よりも「生活」をめざす	海外旅行を海外における「非日常空間」での体験だとするとロングステイは海外における「日常的空間に近いところでの体験」と捉える。
5	生活資金の源泉は日本にある。	主たる生活資金の源泉は日本にあり、現地での労働や収入を必要としないものであること。

上記の定義については幾つかの点に注意する必要がある。まず、表内3の「余暇」を目的とする項目であるが、余暇はその定義上あくまでも労働との対概念として使用される。通常は余暇単独で考えない。しかし、人生の長期化を考慮して労働を主とする生活と余暇活動を主とする生活に分けるならばこの要素も意味あると言えよう。しかし、この余暇を重視するロングステイは、経済的な考慮を余りしなくてもよい階層が主として享受するかもしれない。後述する「経済難民」には、このことは妥当しないかもしれないからである。

表内4の特徴は極めて重要と言える。従来、観光の定義の多くが「日常 → 非日常 → 日常」との回帰を想定していたが、ロングステイにおける海外生活の日常性が第二の日常となると従来とは異なる国際人の大衆化現象が生ずるかもしれない。これが現実化すれば日本人には初めての体験となるだろう。これまではどちらかと言うと、高学歴者を中心とする少数の日本人が異文化体験の保持者であった。しかし、これからはロングステイを通じて異文化に対する理解がより深まることが期待できるだろう。さらに外国の日本文化に対する理解がロングステイヤーを通じて促進されることが期待できよう。その際に大事なことはマナー・モラル・道義的なものであろう。近年、日本人の道義心が廃れ地に落ちたような意見を聞くことが多いが筆者はそうは思わない。多くの日本人は途上国の人々によく見られるように必ずしも拝金主義ではない。依然として額に汗して稼ぐという考えを固持している若者が少なからずいることにこちらがびっくりさせられることもある。

一般に言われているのとは異なり日本人は外国人に対する偏見は少なく、長期的には外国文化をゆっくりと受け入れる寛容性を有してきた。日本人が古代に朝鮮半島・中国大陆からの移民を徐々にしかも大量に受け入れてきた事実を忘れてはなるまい。日本列島が海流と偏西風により周囲の文化が入り込み溜まりやすいが日本人・日本文化が外部に出て行きにくかったと指摘されている。

鎖国を解き外部に再度出始めた日本人は帝国主義的な環境下で軍事的進出を中心とした、と指摘されることが多い。しかしながら、敗戦後五十数年経た今日、日本の良き影響が見直されつつあることも事実である。しかし、軍事的進出のツケは余りにも大きかった。子々孫々にツケを残した愚行を忘れてはなるまい。日本人はこれからは平和的に友好的に外に出て行き、異なる文化の中で活動し余力がある場合は現地の人々への支援を惜しまず日本文化のよき伝道者となることが求められている。

異文化を理解するとは sightseeing などの視覚的なものに止らない。異文化体験は優れて視覚以外の知覚すなわち臭覚、味覚等の体験も併せ持つものである。例えば、タイの東北部イサーンの魚醤バーラの臭いと味は、ビデオで見てもいくら説明を受けてもわからない。まさしく味わってみなければ分らないのである。バーラも日本の醤油も調味料だと納得するには時間がかかるかもしれない。無臭を志向しがちな我々日本人にとり異質の臭気を受け入れるには、時間と忍耐が必要かもしれない。

また、社会生活、例えば買物一つとってみてもバーゲン以外は定価が当たり前と思う日本人にとり商店では値切るのが当たり前と言うことは体験的に学ぶより仕方がないのである。この際に

一番大事なことは、多くのロングステイヤーが身をもって体験したように、日本人とは異なる行動形態や考え、価値観の存在を受け入れることである。もちろんそうは言ってもそれは必ずしもそうした価値観などを認めて自分も同じ様な行動を取ることでない。

特に日本人が違和感を持つのは安全をお金で買うことである。マニラに行くと日本ならばどこにでもあるような住宅地が塀で囲まれゲートがありライフル・ピストルなどで武装したガードマンによりものものしく警備されている。元来、要塞都市の経験がほとんどない日本人にはユーラシア大陸で都市部の住民が城壁内で暮らして異民族の襲来に常に備えていたという経験が欠けている。

以前、広東省出身の中国人と話していた際、彼が近隣の言語（広東省だけで数ヶ国語の言語が使用されておりこのほとんどが相互に意思疎通が出来ない）に関心もないし覚える気もないと言った。その理由は、「何時敵になるかもわからない人々の言語を覚える気にはなれない」と言うものであった。

我々日本人にはこのような感覚が分かりにくい。しかし、安全は無償で手に入ると思える社会は世界でもごく少ない。日本でも安全を購入する習慣が徐々に育成されて来ているようである。

「ご近所の底力」もまだ健在の地域もあろうが地域の安全性が地域住民だけではカバー出来ないようになって来ている。警備保障会社の様々なサービスを購入する人々が増えつつあるように聞いている。かつてただと考えられてきた空気や水と同様に安全も決して無償では手に入らない時代に日本も入りつつあるのだろう。

2. 経済難民は生じないか？ 上記のロングステイの定義には昨今問題になっている経済格差の結果、日本国内では暮らしていくことが困難な人々が入っているのだろうか？ 70歳代後半の恵まれた国民年金の受領者と言えども夫婦二人で月14万円程度である。塩川元財務相も月に25万円は最低必要だと述べている。年金だけでは暮らしていけない人々が着実に増加して来ている。

特に2007年夏に始まったサブプライムローン問題に端を発する世界的な金融大動乱は、实体经济にも波及し2009年現在、日本でも経済が急速に悪化しているとの報道が連日マスコミに流れている。派遣社員のみならず正規社員の解雇など、生活が成り立たない人々に焦点が当てられるようになってきている。

お金持ち日本の実態は、お金持ちは内部留保を溜め込んでいる企業と一握りのお金持ちでしかないことが明らかになりつつある。低所得者、高齢者にとってこの国はますます住みにくいところになりつつあるようだ。

さらに、本稿で取り上げているロングステイ財団の『ロングステイ調査統計2008』によっても「ロングステイの変容」が論じられている。

「また、以前はオーストラリア・ハワイ・ニュージーランド・カナダなど英語圏で治安も気候もよい地域に人気があったが、2000年以降は東南アジア諸国への関心が高まってきた。最近の傾向としては滞在コストが安く、移動時間が短く、暖かい、いわゆる「安・近・暖」の東南アジアのマレーシア・タイ・フィリピン・インドネシア等が好まれ、今回の調査においても滞在希望国のベ

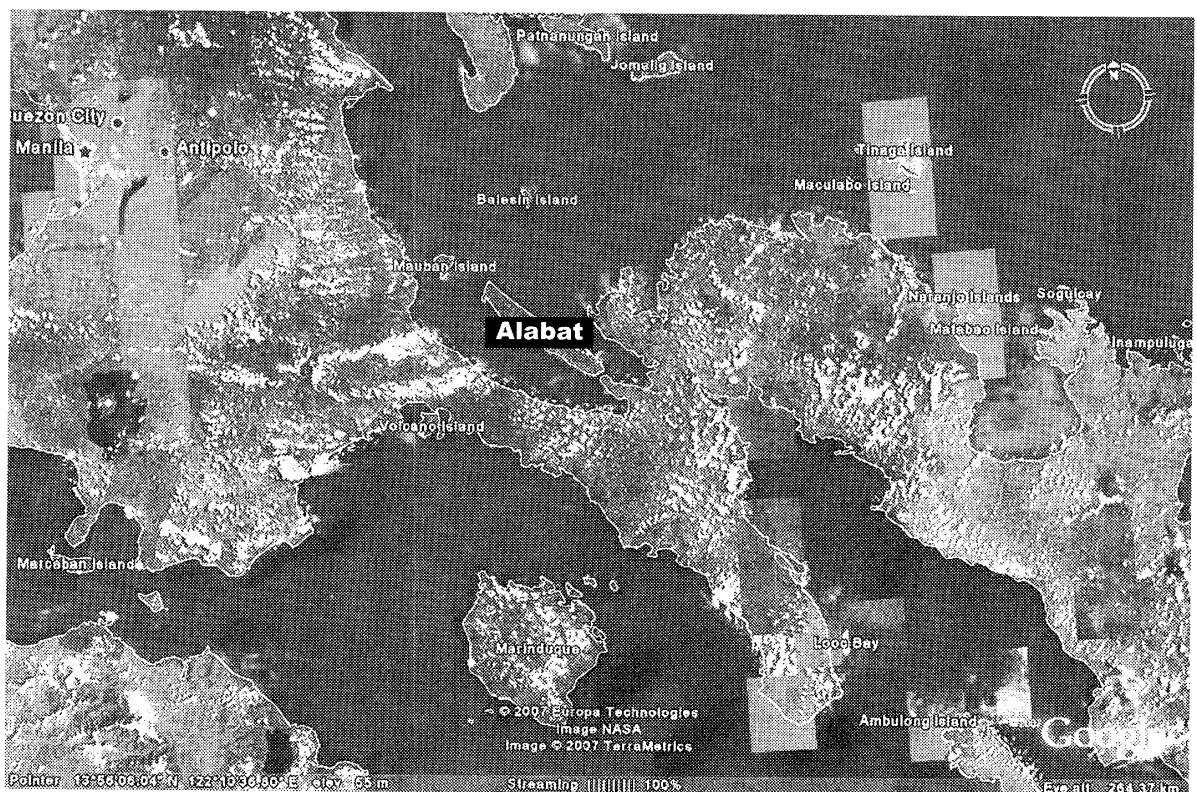
スト10に入ってきている。これらの国は長期滞在査証を設定し、複数年の滞在を可能にしていることも人気の要因と考えられる。」³

この種の人々が顕在化してくるならばロングステイの重要な目標である「生活の主たる源泉を日本に置きながら海外の一箇所に比較的長く滞在し（2週間以上）、その国の文化や生活に触れ、現地の社会での貢献を通じて国際親善に寄与する海外滞在型余暇」⁴よりも生活そのものに重点を置く言わば経済難民的な人々が登場することになる。後期高齢者の医療費問題などの典型的に見られるようにこの国では高齢者を大事にする政策が真剣に考慮・採択されているとも思われない。

本稿では以上のような点を考慮に入れながらフィリピン・アラバット島でのロングステイのリゾート建設の可能性の素描を試みてみたい。もとより筆者は開発業者でもないし、候補地のアラバット島を隈なく調べたわけでもない。従って絵空事になりかねない。しかし、フィリピンにスタディツアーを5回試みた経験を多少なりとも生かして、敢えて言うならば「日本難民」の滞在地としてアラバット島は果たして可能かどうかを考えてみたい。

二. フィリピン・アラバット島

1. なぜフィリピンか？ ロングステイの書籍や情報誌を参照するとフィリピンへの評価は必ずしも高くない。一つにはマニラの治安の悪さ、特に日本人が関与・巻き込まれる凶悪な犯罪が他の諸国に比べ多い点に関係していると思われる。しかし、フィリピンはマニラ以外の土地でのんびりしており静穏である。極端に言えば東京・新宿でも午前3時頃の歌舞伎町の奥は危険かもしれない。確かにマニラは様々な顔を持つ巨大な近代都市であり、なんでも揃っている。近代都市の恩恵を享受したい人々は、マニラがもつ危険性を十分に考慮しながら暮らしている。



例えば、フィリピンでは住宅に金を惜しまないようにアドバイスされることが多い。日本とは異なり塀に囲まれた住宅地がガードマンによって四六時中警護されるのは異様に思われるかもしれないが、上記のようにフィリピンでは安全は購入するものだというのである。言わば西洋や中国の要塞都市のような生活スタイルも身につける必要があるのだろう。

2003年発行、2005年改訂版発行の『ロングステイ』(地球の歩き方編集室)⁵の「人気の8カ国都市生活ガイド」はオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、ハワイ、タイ、マレーシア、スペイン、ポルトガルを挙げているがフィリピンは入っていない。

しかしロングステイヤーの声を細かに拾うとフィリピンに入れ込む人も決して少なくない。何よりも生活費の安さをあげる人が多い。またアジア諸国の興隆とともに情報も実際に現地に行く経験の積み重ねが基盤にあるものと考えられる。欧米中心的な志向はまだ日本で濃厚だがアジアに向ける視線も強くなっている。

2. アラバット島の概要

① アクセス

フィリピンのアラバット島はルソン島の南東にある淡路島くらいの大きさの島である。人口は3万人程度で日本のネットによるとフィリピンでも最貧の島だと出ていた。

しかし、実際に訪問してみるとフィリピンの他の地方とそれほどの違いは感じられなかった。もっとも統計的な資料だとやはり貧しいことには変わりなかった。

マニラからのアクセスはあまり良くはない。マニラからのルソン島縦断道路をほぼまっすぐに南下してアチモナンまで行く。これは車で約5時間近くかかる。アチモナン港からバンカポートという渡し船で約1時間でアラバット島に着く。アチモナンからは島は目の前に見えるが1時間かかる。上記地図を見ると分かるように西側には内海が、東側はるか遠くには太平洋がある。

道路は決して悪路ではないが、やはり5時間も乗ると身体に応えるところがある。この点が解決すべき最大の課題かもしれない。

一つの解決策としては空路が考えられる。アラバット島にはフィリピンにしばしば見られるように旧日本軍の滑走路が存在する。アラバット島の北西部の先端には零式戦闘機の緊急着陸用の滑走路が存在する。しかもこの滑走路は年に1、2回使用されている。もちろん、セスナ機である。飛行機が来る予定が分かると滑走路を管理している(島に三つある町の一つ)ペレス町は滑走路の草刈をする。

滑走路は約850mあり、19人乗りのドルニエ型機は十分離着陸できる。⁶ レシプロ機でもマニラから30分もあれば十分に行けるだろう。アラバット島にシニアリゾート建設を考える場合、陸路と並んで空路が整備されることは大きな利点となる。

もちろんこのアクセスには多くの困難が予想される。当然のことながら飛行機の運航自体が極めて経費が高くつくことがまずあげられる。チャーター便としても採算がなかなか取れないだろう。商業用に運航される際の経費を調べてみる必要がある。

なおグーグルアースの写真を見ても分かるようにこの滑走路は一方の端が内海、他の端が太平洋に接近しているために延長は不可能である。将来セスナ機よりも大きな飛行機を飛ばすとすると長い滑走路が必要となる。これを建設する場合は既存の滑走路と直角に交差する新しい滑走路を建設する必要がある。いずれにしてもペレス町の全面的な協力が必要である。

またフィリピン軍の協力なども視野に入れることも考えられる。間接的なものでも軍の協力が得られれば空路が可能かもしれない。

② 医療機関

一つにはアラバット島には診療所はあるが医師はいない。診療所には医療設備もほとんどない。そのため日本の ODA で建設された島の対岸にあるアチモナン港はアラバット島にとり重要な市といえるだろう。医療機関がある最寄の市と言えばアチモナン市だからである。上記の空路が建設されればマニラ首都圏の最高の医療機関を利用することが出来るだろう。

ロングステイヤーの最大の関心の一つが、医療機関の質と利用可能性にあることはフィリピンの場合も他の地と同様である。

当面は、AIU などの保険会社のサービスを利用することも考慮したほうがよいかもしれない。最近、日本人のロングステイヤーでたまたま AIU の年間 20 万円の掛け捨て保険に入っていた人がフィリピンで癌が判明し大手術を行ったが全て保険で賄うことが出来たという。20 万円の保険料は大病の場合を考えた際決して高額ではない。施設が充実し滞在者も増えればアチモナン市の病院、マニラの病院と契約を結ぶことも考えられよう。

③ 食

アラバット島には魚市場も青果市場もない。島のメインストリートにごく小さな八百屋も兼ねたサリサリストアがあるだけだ。しかし、ここで十数種類の野菜が売られていた。これらの野菜の大半は島外から持ってきたものである。もちろん島で野菜の栽培が出来ないわけではない。商売になる規模では生産されていないだけである。

一般にフィリピン人は野菜を余り食べない。⁷ これはモータライゼーションと相まって肥満化を促進する要因となっている。典型的なフィリピン料理といわれてもなかなか浮かばない。フィリピンで出される料理の多くが鶏肉、豚肉、魚そして米を中心としている。しかも揚げ物が多い。従って 30 歳前後で男女ともに肥満型の体系の人々が多くなるようだ。

健康のためにも野菜や果実をもっととる必要があろう。食生活の変更は人間の習慣の中でもなかなか変えにくいもののひとつであると言われている。しかし、医食同源と言われるように健康の一つの重要な基礎が食生活にあることはいうまでもない。肉食中心の食生活がいかに人間の身体、特に消化器官に負担をかけているかは様々な医師が説明しているところである。

アラバット島でガーデニングによる野菜栽培も種類によっては十分可能である。また日本人ロングステイヤーが必要とする野菜の栽培を現地の人に生産してもらえば、現地にお金落ちることになり双方の利益になるだろう。実際、ルソン島の南端ソルソゴン州では十数年前に故近藤氏が絹さやえんどうを栽培し、それが広まり今では市場に見られるくらいになっている。面白いのはオクラの食べ方である。日本では賞味期限が切れたと誰でも思う毛が立ったオクラ

が売られている。食べ方が異なるのである。日本では生のオクラをみじん切りにして納豆のように混ぜて粘りを出し、醤油などをかけて食するが、フィリピンではゆでて食べる。もっとも日本でも最近ではゆでる食べ方も出て来ているようだ。ちなみにアフリカが原産地のオクラは、南米経由でフィリピンから日本に渡ってきた。日本に広まったのはここ三十年ほどである。

フィリピンの果実はタイほどではないが豊富である。しかし、タイ人ほどには果実を食べないようである。アラバット島のペレス町はランブータンの品種改良に力を入れている。

フィリピンでも主食の米は実に多くの等級がある。インディカ米であるが日本人の口に合うものはなかなかないかもしれない。しかし、インディカ米も調理の仕方如何ではかなり美味しく食べられるようである。

細川内閣の時、不作による米不足からインディカ米をタイなどから輸入した。ろくに食べもせず拒絶反応を示す日本人が多かったように記憶している。油を選びチャーハンなどをインディカ米で作れば十分食べられる。しかし、フィリピンでは穀物を道路で天日干しすることが多いので、穀物に細かい砂利が混じっていることが多いのは何とかして欲しいものである。

さらにアラバット島には漁師がいて漁船もある。バンカボートで1時間であるが、高速フェリーを導入すれば簡単に往来できるだろう。今夏アラバット島を訪問した帰途、アチモナン港を見学した。取引きされる魚介類は極めて豊富だった。ここに水揚げされる魚介類は大半がマニラ首都圏に運ばれる。朝早くから多くのトラックが来ていた。フィリピンは広い。大小7,107もの島々が存在する。だから魚貝類も種々様々である。アチモナン港とマニラにある市場を見学した経験では、日本人が日常食べる魚介類が多く見られた。例えば、何種類ものイカ、太刀魚、かなり巨大なウナギ(大味で煮崩れしやすい)、アジ、サバ、鮭(もちろん輸入ものである、近年、東南アジアの諸国は鮭をよく食べるようになった。例えば、タイも日本、韓国から輸入している)、エビもイセエビ、ロブスターと豊富である。日本にはないがフィリピンでは有名な、はた科の魚ラプラブもある。この魚は現地では高級な魚として知られ味もよい。

特筆すべきはカツオである。昨年も今年もアラバット島とアチモナン港で戻りカツオを見た。昨年も今年も島を訪問したのは8月末から9月初めである。昨年は宿泊させて頂いた家におばさん二人が戻りカツオを売りに来ていた。十分に脂がのったカツオだった。今年はアチモナン港でも見た。アラバット島の東の沖合いに黒潮が流れている。この黒潮にのってフィリピンから伊豆大島までカツオが戻ってくるのである。⁸

フィリピンのスタディツアーで数年にわたりお世話になっている NGO の S 氏は、アラバット島の漁業振興策の具体的なアイデアを有している。廃船となったプレジャーボートの再利用である。現在、日本では廃船化したプレジャーボートの係留地をもつ自治体の悩みの種となっている。もし、これらのプレジャーボートをフィリピンで有効利用できるならば一石二鳥である。フィリピンに運び中古の船外機を付ければ立派な船である。地元の漁民に貸し出したりロングステイの日本人のレジャー用に利用することも可能だろう。アラバット島の太平洋岸にはサンゴ礁があり、ダイビングスポットとなる可能性がある。しかし、東海岸への道路は整備されていず海路の方がアクセスが容易かもしれない。また地元の漁協と協調しながらの話だが、

将来ロングステイのリゾートがつくられた場合、重要な食糧源となりうるだろう。

フィリピン人の食生活に対する日本人の反応は様々であろう。しかし、日本ではフィリピン料理店なるものが存在しない。⁹ 私見ではあるがフィリピン料理は個性がないように思われる。タイ料理のように香菜をふんだんに使用した料理とも異なる。

今年度(2008年度)のフィリピンスタディツアーでは、学生とカレーライスとそばを作った。交流したフィリピン人も喜んで食べていた。フィリピンの醤油もあったが日本の醤油と比べるととても甘く、そばのつゆに使用するのに苦労した。

日本人のロングステイ村をつくるにあたっては、食事の問題が大事である。マニラの近郊で5年間経営している日本食レストランで学生と食事をした。店主は日本人で、ウエイトレスはフィリピン人である。主人は一人で調理をしてがんばっている。しかし、出された料理はフィリピン化している日本料理だった。天ぷらも衣がからっと揚がらない。汁もへんに甘い。まあフィリピン人の好みに合せばこうなるのかもしれないが、中高年の日本人には頂けないものだろう。

日本食の食材はかなり豊富にある。また気候がよいので多くの野菜も栽培可能である。委託栽培やロングステイヤー自身に栽培してもらい購入してもよいだろう。

長期滞在となると毎日の食事は大事である。

④ 島の産業

フィリピンは台風の通り道の一つでもあるが、特にアラバット島は台風銀座通りとも言える。台風の被害で道路が被害を受けることもしばしばである。

＜ココヤシ＞農業は自家消費程度の生産でしかない。フィリピンのどこでも見られるココヤシが重要な資源であることはここでも同じである。他の熱帯諸国でも同様であるが、ココヤシは日本のコメに近い存在である。ココヤシは葉や幹も含め無駄になるところは何一つとしてないくらいである。

ココヤシの果実は実に様々な利用方法がある。大きくなった半成熟果の胚乳は液状の胚乳液と内果皮に接した部分のゼラチン状の脂肪層とに分化し、胚乳液は飲用に、脂肪層は食用にされる。成熟菓になると脂肪層は硬くなる。これをけずり、しばったのがココナッツミルクで、あらゆる食物の調味料として熱帯では多用される。また、この脂肪層をはぎとって乾燥したのがコプラである。コプラはマーガリン、セッケン、ろうそく、ダイナマイトなどを作る油脂原料となる。発芽が始まると、胚乳液の部分は油脂分に富むスポンジ状になり食用となる。花房を切ると切口から出る樹液は飲用となり、これを発酵させたものはヤシ酒や酢となる。中果皮の繊維はヤシロープや燃料になる。特にアラバット島ではこの繊維工場がありここで生産された繊維はベンツなどの高級車のクッションに使われている。

＜バナバ茶＞フィリピンの換金作物で見逃せないのがバナバ茶である。バナバは東南アジアに生育するミソハギ科の高木で、日本名をオオバナサルスベリという。花の色が朝夕でピンクから薄紫に変化することから天人花とも呼ばれている。バナバの葉を乾燥して煎じてお茶として飲む風習はフィリピンでは昔から知られている。健康維持のために広く飲まれている。特に

バナバ茶は血糖値を下げる効果があることは医学的実験によっても確証されている。インターネットを見るとすぐ分かるが、日本でもバナバ茶はネット販売を中心によく売られている。

しかし、多くのバナバ茶が添加物を含んでいたり、価格もかなり高い。安価で安全なバナバ茶の生産販売は日本のみならず糖尿病患者を多く抱えている韓国、台湾、中国などに販売のチャンスはあると思われる。

なおフィリピンでは、現アロヨ政権が数年前に打ち出した、全土にバナバの木を 100 万本植えようという運動が続けられている。

⑤ 土地

アラバット島の地価は極めて安価である。しかし、フィリピンでは外国人は土地を所有できないので、現地法人を立てて買収する必要がある。但し、ロングステイヤーが不動産を購入するのはリスクが大きいという財産の保全との観点からは有効とは思えない。¹⁰ 土地は現地法人を設立して購入するか借地の方が安全と思われる。現在、日本人とフィリピン人が協同で運営しているロングステイ村の中には、財産保全とはならない高額のコンドミニアム方式を募集しているところがあるが、つぎ込んだお金が急速に減少するケースが多いので要注意である。

3. 終わりに

日本人の海外ロングステイが定着するかどうかは日本経済の動向によるところが大きい。しかし、(2008 年 12 月現在)世界的な金融動乱の時代の落ち着く先は不透明である。現在のところ各国の通貨のうち円だけが独歩高である。今こそ海外通貨を投機的に買い込むだけでなく海外、とりわけアジアの隣人で金融危機に喘ぐ国々のためになることをも考え、実行も視野に入れるべきである。

但し、どの国でもそうだが、現地にいる日本人が利益しか考えずに現地の人々と組んでいろいろな事業を推奨することには十分注意しなければならない。しかし、フィリピンは決して住みにくくないと思われる。次第に多くの日本人が渡りつつある。

- 1 財団法人ロングステイ財団、2008 年、『ロングステイ調査統計 2008』財団法人ロングステイ財団。
- 2 同上。
- 3 同上。
- 4 同上。P.75
- 5 『地球の歩き方』編集室編著、2005 年『地球の暮らし方⑩ロングステイ 2006～2007 年版』ダイヤモンド・ビッグ社。
- 6 国際航空法によると乗客が 19 までだと客室乗務員はおかなくてよい。
- 7 フィリピンに駐在する多くの日本人が便秘と下痢に悩まされるようだが野菜不足も原因となっているようである。
- 8 アラバット島沖合いの黒潮を利用して高速フェリーを日本まで運航するアイディアがある新聞紙上で 2 年前に紹介された。それによると 24 時間で東京に来るそうだ。もし今後、このプロジェクトが実現するとますますフィリピンが身近な地になるだろう。
- 9 かなり以前に東京駅の付近にあったが余り経たないうちに閉店したという。もしかしたらどこかにあるかもしれない。
- 10 今防人、2008 年「フィリピンにおける日本人ロングステイの可能性」『実践女子短期大学紀要第 29 号』参照。